

婚儀を挙げてからの文若は、雰囲気が柔らかくなつた様に花は思う。

以前は、これ見よがしな気難しくて近寄り難い雰囲気を醸し出して、側で手伝う事になつた花も最初はそれがちよつと苦手だつたのだ、実は。

それなのに、こうして夫婦として暮らしていく事になつたのだから、人生何が起こるか分かつたものではない。

そんなある日の事。

「それでは、この書簡を中書省へこちらは門下省へ。多分それから私宛への書簡もある筈だから、それも一緒に頼む」

「はい、分かりました」

もう大分宛先を間違えるような失敗は少なくなつてきた物の、それらを注意深く受け取りながら花は執務室を後にした。

いつものようにお使いに出た所で、銅雀台で働く女官たちが、笑いさざめきながら花の脇を通り過ぎた。

「あら、ごきげんよう花様」

「ごきげんよう、皆様」

その中の顔見知りの女官が花に声を掛けてくれる。それに笑顔で返して、そのまま通り過ぎようとした。

「そう言えば、最近の文若様は……」

「ええ、本当に……」

ちらりと花の顔を見て、思い出したかのように噂話を花を咲かせる。それらの中からふと漏れ聞こえた夫の名に、花はつい耳をそばだててしまった。

盗み聞きもどうかと思つたけれども、気になつてしまったものは仕方がない。花はそう自分に言い訳をして、女官たちが回廊を曲がつたその角でそつと聞き耳を立てた。

「最近の文若様は雰囲気が柔らかくおなりで」

「ええ、それに元々の見目も宜しいですし」

「それでしたら、私、もつとお側でお仕えしておくんですわ」

「あら、私だつて……」

等と言うかましい噂に、目くじらを立てる必要はないのかもしれない。それに、おそんな噂話にそれ程の本音が含まれているとも思えない。それに悪い事を